

ちどり 令和5年1月度特別作品

京都 ちどり

秋に大学を卒業した娘が広島に帰ることにな  
り、京都に引越しの手任に行きました。その今  
間に、名残惜しむように最後の京都観光をし  
ました。娘が京都にいる間、様々な場所を巡り、す  
かり京都が好きになりました。

実南天京都に居る子卒業す

ワゴン車で京都へ走る紅葉山

紅葉の大文字山見上げけり

風や家族で渡る渡月橋

若沖の群鶏を見る十二月

機織の音聞こえたり冬の朝

子と夫と荷造りをする室の花

古蒲団に互ひ違ひに眠りをり

冬日差す子の部屋すつかり片付いて

山茶花や荷を積み車出発す

《作品鑑賞》

森口良樹

京都という歴史の町を背景に、お子さんの卒業を祝う、ちどり  
さんや旦那さんの暖かいまなざしを深く感じ、句を読ませていた  
だきました。

子と夫と荷造りをする室の花

ちどりさん夫婦の、愛する娘さんの様子が垣間見え、室の花が大  
学生活の終焉を惜しんでいるように受け取れました。

機織の音聞こえたり冬の朝

西陣織の機織を思わせて頂きました。伝統技術の伝承の様は冬の  
朝も手が悴みながら絶えず続けられるのでしょうか。なぜか、冬の  
朝の季語に生地を晒す様子まで見えてしまいました。

古蒲団に互ひ違ひに眠りをり

ある程度部屋が片付いているのでしよう。娘さんの住み慣れた下  
宿先に一家が寄り添い、きつと、深い眠りにつかれたのでしよう。

石川晩秋の旅

井藤希

秋の終りに、妻と犬と一緒に車の旅に出た。行先は金沢で、ここを拠点に四、五日能登などを観て回った。金沢は二十数年前に三年間暮らした町で、その後も何度か訪れているのだが、今回のこの季節はひどく懐かしい思いがした。能登では、初めて千枚田に行った。この田の一枚一枚は、本当に小さなものだが、先人達が掘き耕してきた姿を現在の景色に観ることができて、誠に素晴らしいものである。既に冬に入る季節ではあったが、金沢の懐かしい場所にも、能登の初めての風景にも、心に暖かさが残る、そんな旅となった。

新蕎麦を食うて琵琶湖を離れたる

犬乗せて峠を越ゆる暮の秋

霧晴れて白山空に満ちてをり

秋灯や連れ立つ路地に覚えある

奥能登を臨む峠や雪雲

禅寺の僧に会釈す落葉時

鳴き砂の沈黙したる冬の浜

凧やせめて棚田に夕日来よ

寒雷は能登の海より鳴り出しぬ

旅のはや終はりて能登の山眠る

《作品鑑賞》

村上正人

「石川晩秋の旅」の作者である井藤希さんは、句会では納得するまで佐保先生に質問する、向上心旺盛な方だ。

この作品では、二十数年前に三年間暮らした金沢を、奥様そして愛犬と一緒に車で旅され、晩秋の金沢の情景と能登での初めての景色などを読み手に印象深く伝える特別作品にまとめられた。

霧晴れて白山空に満ちてをり

霧が晴れた先に白山の雄大な姿が現れる。「空に満ち」ているという表現が白山を表す他のどのような表現をも凌いでいるように思われる。

凧やせめて棚田に夕日来よ

能登の千枚田に先人達の労苦を感じる折、冬の訪れを思わせる凧ではなく、せめて夕日だけでも出て、田を照らす景が見てみたい。そのような作者の願いが伝わる作品である。

寒雷は能登の海より鳴り出しぬ

冬の雷は夏の雷の十分の一ほどの高さの低い雷雲で発生し、同じ場所で連続して発生することから危険な雷といわれる。冬の能登沖に垂れ込めた雲や海の色までもが想像でき、不気味さも伝わってくる作品である。